



「ある時に」のための「今」

前号で紹介した『暇と退屈の倫理学』（國分功一郎、朝日新聞社）の「あとがき」にこんなことが書いてあった。

＊

この本で取り上げた問題は、何よりも自分自身が抱いていた悩みだった。〈暇と退屈の倫理学〉という言葉を書いたのは、本当はずっと後のことだが、とにかく本文で取り上げた退屈の苦しさを自分もずっと感じていた。しかし、それを考察してみることはなかなかできなかった。

斜に構えて世間をバカにし、この悩みをやり過ぎそうとしたこともあった。誰かのせいにしたこともあった。決断しかないとはいった。不満のはけ口を求めて、周囲にやたらとくっついてかかっていたこともあった。

だが、ある時にこの自分の悩みを考察の対象にすることができるようになった。確か大学院の博士課程に入る頃だったと思う。どうしてそういうことができるようになったのか、自分でもよく分からなかったのだが、いま考えてみると、ある程度勉強したからだと思う。哲学とか思想とかいった分野のことをすこしだが勉強して、自分の悩みとどう向き合っていけばよいか分かってきたのである。勉強というのはなんとすばらしいものであろうか。

＊

筆者は遠慮して「哲学とか思想とかいった分野のことをすこしだが勉強して」と謙遜して述べているが、東大の大学院博士課程まで行っているのである。「すこしだが勉強」なわけがない。悩みながらもコツコツと勉強し

続けていたに違いない。

進路が決まらないで、「斜に構えて世間をバカにし、この悩みをやり過ぎそうとしたこともあった。誰かのせいにしたこともあった。決断しかないとはいった。不満のはけ口を求めて、周囲にやたらとくっついてかかっていたこともあった」という状態に、今陥っている人もいないのだろうか。

それは「とりあえず進路は決めたが、そこでいったい自分が何をやりたいのか分からない」、いや、「やりたいことは何となく分かっているのだが、それが実際にできることなのかどうか分からない」という悩みを抱えていた筆者と重なる部分があるに違いない。

それを解決したのが、筆者にとっては「(大学に入って)ある程度(これも謙遜だろう)勉強したからだ」ということだったのである。

＊

進路の悩みはなかなか難しい。しかしそれは、今現在の自分の「狭い世界観」でもものを見ているからかも知れない。「とりあえず好きなこと」「とりあえず興味がありそうなこと」に向けて船出すれば、航海の途中で新しい世界が開けてきて、そこに自分にふさわしい進路が見えてくるのではないだろうか。

同時に、進路に悩んでいる人は、単に目の前の「進学」という現実に向かい合うことに自信がなく、「斜に構えて」いるだけなのではないかという点についても、素直に自分を見つめ直してほしいと思う。

やりたいことは努力することで実現できるのである。その努力をしなければならない時が、ズバリ「今でしょ！」なのである。